

第4章

特徴的な取組の紹介

児童生徒の学力を伸ばした学校の実践を紹介します。

各学校において、本章で掲載されている児童生徒の学力の伸びを引き出した効果的な取組を、今後の取組の参考としてお役立てください。

今年度は、以下の8校の取組を紹介します。

草加市立稲荷小学校	ふじみ野市立元福小学校
上里町立神保原小学校	加須市立元和小学校
桶川市立桶川西中学校	所沢市立狭山ヶ丘中学校
深谷市立藤沢中学校	越谷市立大袋中学校



草加市立稲荷小学校の取組

1 本校の概要

本校は草加市の東部に位置し、今年度で開校 48 周年を迎えた。児童数 452 名(9月1日現在)、学級数 19 学級、教職員数 28 名の中規模校である。

本校では『自ら学び 心豊かに たくましく』を学校教育目標に掲げ、「花さく 夢さく 笑顔さく 明日への希望 いなりっ子」を合言葉に教職員が一丸となり、「児童一人ひとりを大切にする教育の推進」を学校経営方針として、主体的に学ぶ力、豊かな人間性、たくましい心身の育成を目指している。



【稲荷小児童の学力向上イメージ】

2 令和 5・6 年度の結果

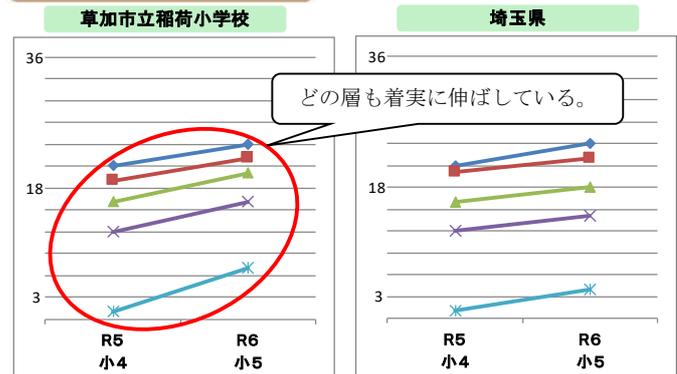
小学校 4 年生→小学校 5 年生の取組【国語】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



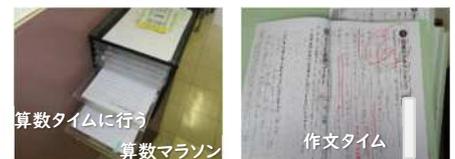
学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 学習の土台づくり

朝の活動時間に基礎的・基本的な知識・技能の定着のための児童自身の課題に応じた反復学習を行った。

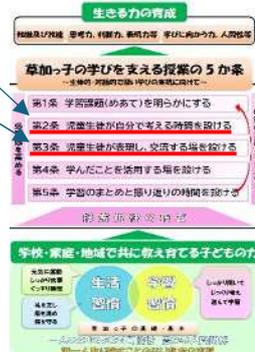


イ 授業改善：「草加っ子の学びを支える授業の 5 か条」の徹底

草加型の探究型授業の基本プロセスの中でも「第 2 条 児童が自分で考える時間を設ける」及び「第 3 条 児童生徒が表現し、交流する場を設ける」に重点を置いた授業設計を行った。

- ・ ICT の効果的活用 (考えの表現や交流の場面で活用)
- ・ 学習規律の徹底
- ・ 継続的な学び方の指導

(ノートの書き方、考えの伝え方)



ウ コバトンのびのびシートの分析活用

「児童が意識すること・実践すること」と「教師が意識すること・実践すること」の双方向からのアプローチで、学習方略と非認知能力の向上を目指した。



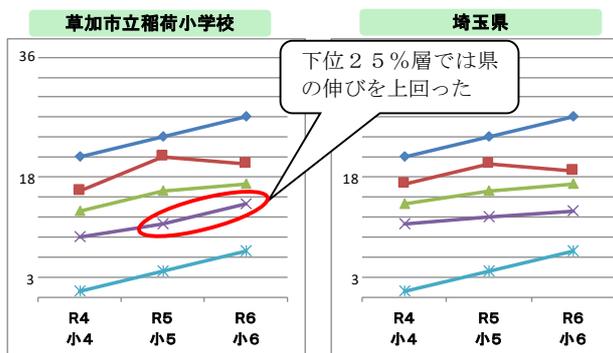
小学校5年生→小学校6年生の取組【算数】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 指導体制の充実

単元や学習内容に応じた指導体制を工夫することできめ細やかで、児童に寄り添った指導を行った。

- ① チームティーチング
- ② 等質で分けた少人数指導
- ③ 習熟度別少人数指導
- ④ 課題に応じた個別指導



イ 稲荷寺子屋（授業外の学習支援）

業間休み等に希望者を対象とした授業外の学習支援を行った。

- ・これから学習する単元に関わる既習事項の復習など
- ・新しい単元の学習前に行うレディネステストなどをもとに、つまづきが見られる児童への支援

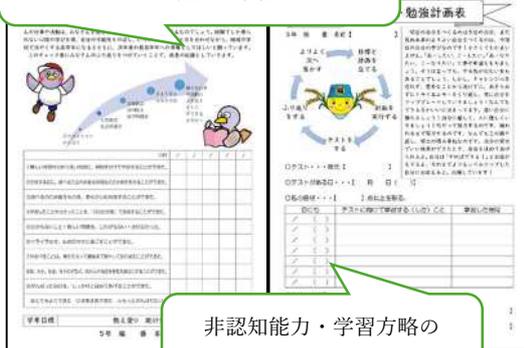


学校全体での取組

計画・実行・振り返り

「児童が意識すること・実践すること」の1つとして、学習や行事における計画・実行・振り返りに取り組んだ。目標に向けた具体的な自身の取組について計画することや振り返ることを通して一つ一つの物事に集中して取り組むことができるようになった。

プランニング方略を高めるための
テスト勉強計画表



行事を通しての成長





ふじみ野市立元福小学校の取組

1 本校の概要

本校は、今年度 50 周年を迎えた、児童数 279 名、学級数 13 の小規模校である。学校教育目標「かしこく・なかよく・たくましく」の下、今年度は「一人一人の子供たちの笑顔が輝く学校」をめざす学校像とし、どんな場面でも「笑顔」をキーワードとして活動している。授業中には、真剣な中にも子供たちや教職員に笑顔が見られ、安心感のある和やかな雰囲気が子供たちの成長につながっている。「タブレット端末の活用方法と効果的な指導方法～教員の ICT 機器等のパソコンスキルの向上～」を学校研究課題とし、学び合う活動や ICT 機器の活用等に力を入れている。

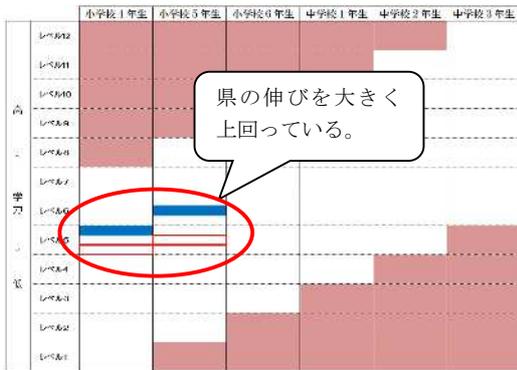


2 令和 5・6 年度の結果

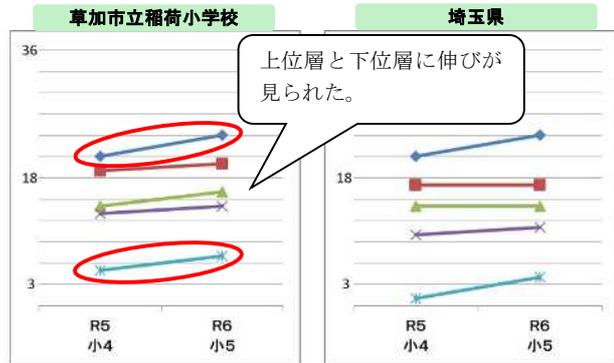
小学校 4 年生→小学校 5 年生の取組【算数】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア T・T(ティーム・ティーチング)、習熟度別学習

第 4 学年の算数の学習では、T 1 が主となり指導を行った。その際 T 2 が支援の必要な児童への支援や、練習問題を解く補助などを行った。

また、児童の実態に応じて、単元によって習熟度別学習を行った。授業を受けるコースは、児童にも希望を取り、納得したグループで学習を行った。上位層では積極的に練習問題・発展問題を解き進めていき、中位層から下位層では指導内容や実態に応じた進捗で授業を展開した。上位層は、問題をたくさん解くことで大きく力が伸びた。中・下位層では、自力解決に十分な時間をかけて授業を進め、できた・わかったという実感を味わわせることができた。



イ 自己肯定感・自己効力感を伸ばす取組

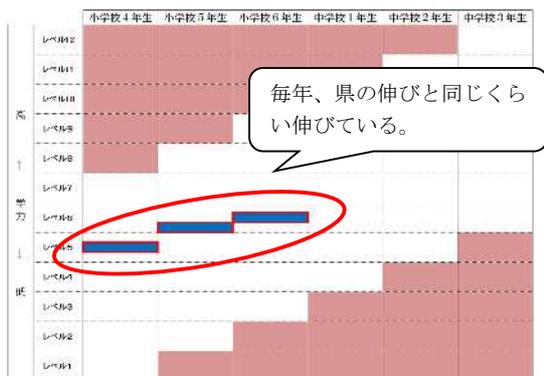
教科書や問題集の問題を解く際には、途中式やメモ等を書くように指導し、全員が丸をもらえるまで見届けた。朝の活動で、これまでに学習した内容を復習する基礎算数を全校で行っている。

また、年 9 回 7 時間目(放課後)に、支援が必要な児童を対象にした学習会も行っている。これらの取組を通し、支援が必要な児童も、できた・分かったという実感をもつことができるように指導している。年間を通して自主学習にも力を入れ、児童が考え学習してきた内容を評価し、全体に共有することで、個々が学習に取り組む意欲が向上し、学力向上につながった。

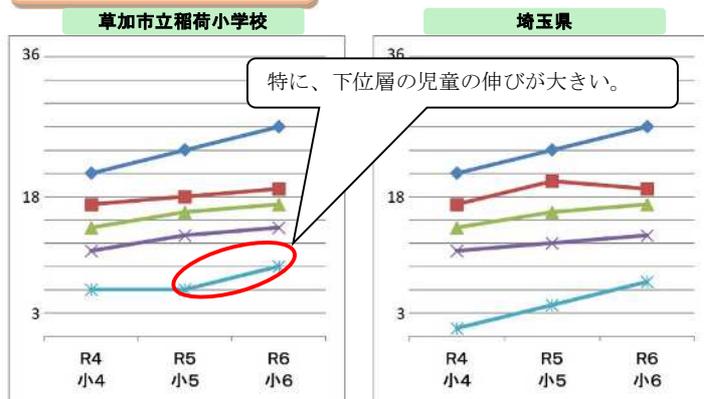
小学校5年生→小学校6年生の取組【算数】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 習熟度別少人数指導

第5学年では、習熟度別少人数指導や個別指導で補充問題に取り組ませた。習熟度別は、レディネステストの結果で児童と相談しながらチーム編成（10人以下）をした。

イ 授業の工夫

下位グループでは、次の3点について授業の工夫をした。①板書をシンプルにし、文章題などはキーワードだけをノートに記述することで、問題文からキーワードを探せる習慣を身に付けさせた。まとめは、教科書の文章を要約したり、児童に分かりやすく変換したりした。②小数点の移動や図形等は、体を使って学べる時間を取り入れた。③計算力向上のために、練習問題はみんなで行い、その後、個人で補充の問題や計算スキルなどの練習問題に多く取り組ませた。早く終わった児童は、友達へ教えることにした。これにより、理解が深まる児童も多く見られた。

ウ 家庭学習の取組

算数の学習は、その日に授業で学習した内容のものを出した。本時の学習と計算コーナー（四則演算）と文章題が入ったプリントを用意し、計算単元では、書き込み式の計算スキルを課題にした。また、下位グループは、自主学習で学習する内容を指定して取り組ませた。

学校全体での取組

(1) 学校課題研究の取組と継続

本校では、令和2年度より算数科を中心とした学校課題研究を進めた。3年間にわたる研究の中で、令和4年度には西部地区学力向上のための授業研究会における研究授業や、入間地区算数数学教育研究協議会での研究発表を実施した。研究終了後も算数科の充実に努め、学校全体で取組を継続している。令和5年度からは、学校課題研究のテーマをICTの活用に移し、ICT機器の日常的な活用を主軸に据えた研究を開始した。ICT機器を単なる目的ではなく、児童の学力向上を図るための手段として活用することを重視し、その効果的な活用方法を模索した。このような方針により、ICT機器が日常的な授業の一環として自然に取り入れられ、教員が過度な負担を感じることなく活用できる環境を整えた。その結果、教員それぞれの強みを活かした授業づくりが可能になった。

(2) 学力向上の取組

本校では、学校経営の基本方針である「よさを認め、褒めて伸ばす」を再認識し、全ての教育活動において児童を積極的に褒めて成長を促す意識をもち続けた。基本的なことを徹底する姿勢が、児童の学力向上にも寄与していると考えている。また、地域のサポーターと協働し、年に9回「学習会」を実施した。この活動では、対象を3～6年生に限定し、算数に課題を抱える児童への支援を重点的に行った。その結果、学力の向上や児童一人一人のつまづきを丁寧に支える環境を整えた。



上里町立神保原小学校の取組

1 本校の概要

本校は、埼玉県北部の農村地帯にあり、学区の南にはJR高崎線が、また学区内を国道17号線、旧中山道が通っている。また校区の北側には烏川が流れ、群馬県と接し、赤城山をはじめ上州の山並みが遠望できる。

明治19年(1886年)4月26日に上喜太小学校が忍保善臺寺を充用し開校したところから始まり、大正3年(1914年)には、神保原尋常小学校と改称し、昭和16年(1941年)に神保原国民学校、昭和22年(1947年)には6・3制の実施により神保原小学校と改称した。令和6年で開校138年を迎えた。



2 令和5・6年度の結果

小学校4年生→小学校5年生の取組【算数】

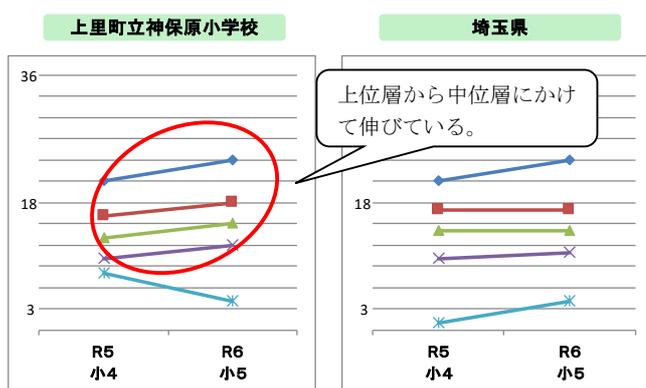
(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



県平均と同程度伸びている。

学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 友達と関わりながらの課題解決

グループやペアでの学習を中心に授業を組み立てた。分からないことは友達に聞いたり、考えを説明し合ったりして、関わりの中から問題解決能力を身に付け、理解を深められるようにした。どの児童も独りにならないよう、教師は困っている児童がいたら、友達とつなぐ役目をした。

また、発展的な課題に取り組ませ、グループの友達と協力して解決することで、児童の意欲を高め、やり抜く力の育成を図った。



〈グループで学び合い〉

イ 学習方略や非認知能力に関すること（自主学習）

児童が計画を立て主体的に学習に取り組めるように、自主学習に積極的に取り組ませた。ノートに繰り返し書いたり、公式を声に出したりするなど、自分で学習内容や方法を考えさせることで知識の定着を図った。授業では、多様な考えを引き出す工夫（発問や教材の提示など）をし、考えたことを友達に自分の言葉で説明させた。

また、学級会を通して、クラス全員で遊ぶ時間を多く設け、協力して遊ぶ楽しさを味わわせ、所属感や安心感を高めさせた。この取組により、児童は学校が楽しいと感じるようになった。



〈多様な考えを引き出す工夫〉



〈クラスレク〉

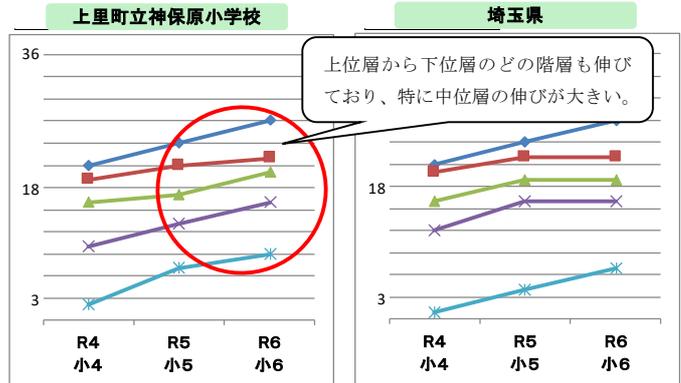
小学校5年生→小学校6年生の取組【国語】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 読む、書く、話す力を鍛える継続的な指導

毎月「暗唱チャレンジ」を行い、合格するまで繰り返し挑戦させた。また、朝学習で、短作文やコラム学習に継続的に取り組ませ、ポイントに沿って文を構成する練習を繰り返し、書く力を伸ばした。グループやペアで話すときは、筋道を立てて話すよう指導し、日々の授業で取り組むことで、話す力が向上した。



イ 学習方略や非認知能力に関すること（一人一人を大切にした学級経営）

一人一人を大切にしたい学級経営を通して、分からないことを友達や教師に聞ける雰囲気づくりに取り組んだ。毎月、生活アンケートを取り、気になる児童には必ず聴き取りを行い、児童が安心して学校生活を送れるよう配慮した。学校生活全般を通して、友達と協力して活動する場面を多く設け、学級への所属感をもたせることができた。



〈チームで協力〉

学校全体での取組

(1) 特別活動を中心に据えた学級経営

- ・学力向上と学級経営に相関関係が見られたことから、特別活動の指導者を招聘し、学級活動(1)を全クラス公開した。合意形成の仕方や教室環境の整え方などを学級経営に生かした。
- ・全学年で、学級会ボードを統一し、学年が変わっても同じ流れで学級会が行えるようにした。話合いの議題と決まったことを書いた「議題の木」を作成し、児童用通路に掲示して、どの学年がどんな議題で話合いをしたか一目で分かるようにした。話合いを重ねることで、折り合いをつけ、相手の意見を尊重する気持ちが育ってきた。



〈学級会ボード〉



〈学級会の様子〉

(2) 学び合いを主軸とした授業を展開

- ・「きく・つなぐ・もどす」を意識した授業づくりを行った。
- ・「わからない」が言える、話を「きく」ことができる児童の育成を目指し、分からないことを大切にするための「分からない達人」「きき方達人」カードを作成した。教室に掲示したり、児童の机に貼ったりして、意識付けを図った。
- ・ペアやグループで、発展的な課題に協力して取り組ませた。



〈「分からない達人」「きき方達人」カードの掲示〉



加須市立元和小学校の取組

1 本校の概要

本校は全校児童 290 名、学級数 14 学級の中規模校である。大利根地域の中央部に位置し、学区内には、文化体育館、福祉会館、保健センター、童謡のふる里図書館「ノイエ」等の公共施設が設置され、大利根地域の教育・文化の中心となっている。「つよく」「かしこく」「しんせつに」を学校教育目標とし、日々の教育活動を推進している。



2 令和 5・6 年度の結果

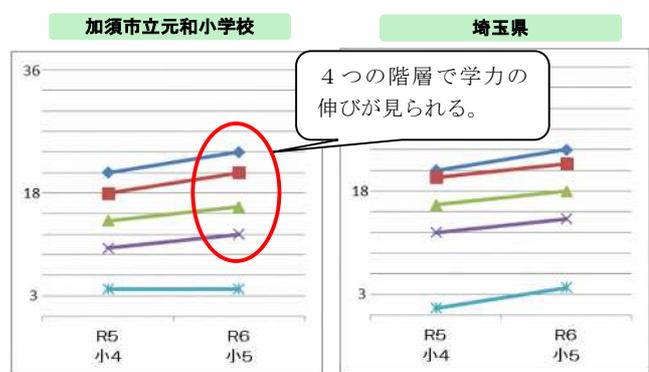
小学校 4 年生→小学校 5 年生の取組【国語】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組「アウトプットのためのインプット」

ア 主体的かつ意欲的に取り組ませる学習指導の改善

・学びに向かう教室環境づくり：知識や経験のインプットがしっかりできるよう、単元の目標や目的や1単位時間の学習過程を示し、児童が見通しをもって学習に取り組めるようにしている。また、学習したことを教室内に掲示して、単元を通して何を学んできたのか（インプットしてきたのか）をいつでも振り返ることができるようにしている。



・インプット、アウトプットする時間の確保：教師の発問計画を徹底し、児童が教材に向かう時間、思考する時間（インプットの時間）を十分に確保する。また、個人→ペア・グループ→全体→個人というように、友達同士で思考のアウトプットをする時間や個に戻って考える時間を確保し、思考のイン・アウトのスパイラルによる学びの深化を図っている。

イ 学習方略や非認知能力に関すること

・学習に意欲的に取り組む児童の育成【やりぬく力・勤勉性】

- 〔反復〕授業で大切なところ、漢字、テストで間違えた問題など、定着が必要な点については、復習を徹底させてきた。（インプット）
- 〔メモ〕授業中大切だと思った点について、自主的にノートにメモする指導と、ノートの見届けを継続して行ってきた。（インプット、アウトプット）
- 〔諦めない心〕作文や日記を最後まで書く指導や、難しいと感じる問題に対し自分なりの考えや言葉を答えさせる指導を繰り返し、無解答をなくしたり、ねばり強く取り組む姿勢を育てたりしてきた。（アウトプット）



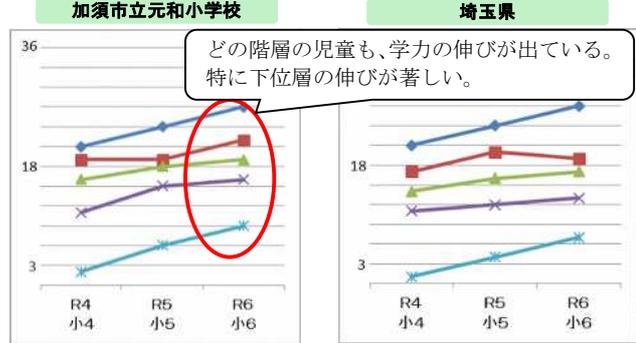
小学校5年生→小学校6年生の取組【国語】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組「アウトプットしたくなる取組」

ア 魅力的かつ必然性のあるゴールを設定した学習指導の改善

- 目的意識、相手意識を明確にした言語活動、単元ゴールの設定
『伝えたい相手や、明確な目的があるからアウトプットしたくなる』
そんな単元のゴールや、言語活動を設定した授業に取り組んできた。
～言語活動例～
「修学旅行を成功させるために、日本文化の魅力を友達に発信する」
「たんぼぼのちえブック」 「本物の獣医さんにお手紙を書こう」
「昔の遊びリーフレットづくり」 「新説！一つの花」 など



- 指導事項をおさえた言語活動、単元のゴールの設定
単に魅力的なゴールでなく、指導事項をおさえた言語活動・単元のゴールを設定した授業を考案、計画してきた。それに向かって児童が何を学ぶか、探究するかに重点を置いた授業展開をしてきた。

イ 非認知能力や学習方略に関すること

- 計画的に学習に取り組む「自学ノートの活用」【プランニング方略】
計画的な自主学習に取り組ませている。テストや学力調査、苦手克服など、何のための自主学習なのか目的と計画を持たせた上での自主学習を指導、奨励している。
- 行事への積極的な参加、運営への携わり【自己効力感】
様々な行事に際し、一人一回以上、計画や運営の役割をもたせ、自信や達成感・充実感を高めさせる取組を行ってきた。（林間学校、就学時健康診断、開校150周年記念行事、6年生を送る会、委員会活動主催の児童集会等）



自学奨励の一環「校長（こだま）賞」

学校全体での取組

(1) 一人一授業の提案

全職員が国語の研究授業を実施。授業の基本をスタンダード化し、何を学ばせるのかを重視した指導案検討会などを通して、学習指導改善に努めている。

(2) 作文指導の取組

- ステップアップ作文：業前の時間を使い、毎月全校で作文に取り組んでいる。
テーマと書き方の条件を出し、児童は事実をもとにして文を作っている。
- マイニュース：音読カードの下のスペースに100字程度の短作文枠を設け、毎週1回日記を書いたり、新聞・ニュースを見て関心が高かったことについての意見を書いたりしている。



元和小 授業の基本 <国語> ～説明的文章編～	
学習活動	指導上のポイント
<ul style="list-style-type: none"> 学習の意図しをもつ。 前時の課題をやる。 めあての理解がさる。 単元の意図しを軸にさせる。（単元計画） 	<ul style="list-style-type: none"> OICTの活用。（異種物や異種物の提示） 単元のゴールを予め提示しておく。 授業の進め方から、単元計画を作成する。

元和小 授業の基本 <国語> ～文学的文章編～	
学習活動	指導上のポイント
<ul style="list-style-type: none"> 学習の意図しをもつ 前時の課題をやる めあての理解がさる 	<ul style="list-style-type: none"> 児童しをもって学習できるように。 単元のほかに学習計画を立てる。 単元のゴールや本時のめあてを明確にする。 言語活動のモデルを示す。 興味関心や読解能力をよとする気持をもたせるために、日常、社会生活との関連を図ったり、自分事として捉えさせた。 授業に、相手意識や目的意識、必要性（必然性）のあるゴール



桶川市立桶川西中学校の取組

1 本校の概要

本校は生徒数488名、特別支援学級4学級を含む17学級の中規模校である。今年度、創立50周年を迎え、地域、保護者の皆様による実行委員会企画の記念式典が盛大に行われた。学校応援団活動が活発な緑豊かな学校である。

本校では、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』のある学習活動」を研究主題とし、授業改善に取り組んでいる。学力向上とともに非認知能力の育成を目指している。



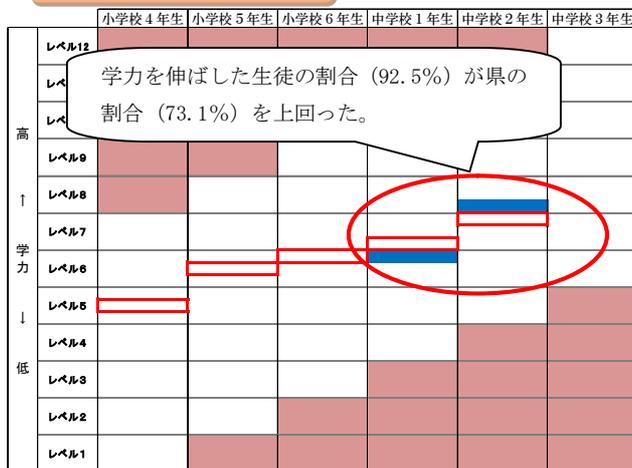
桶川西中イメージキャラクター「にしぼん」

2 令和5・6年度の結果

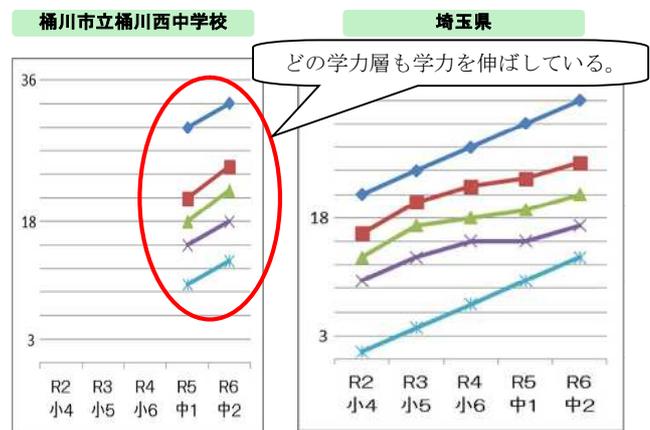
中学校1年生→中学校2年生の取組【数学】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 「個別最適な学び」と「協働的な学び」のある学習活動の充実

授業形態は基本的に4人班による。選択問題の場面において、一人一人の興味関心に応じた学習課題に取り組む。選択問題をグループ内で説明する場面や選択問題の解決プロセスを統合的に考える場面では生徒同士の学び合いを取り入れる。



事例 二等辺三角形の性質の授業

(ア) 問1 選択問題を解決する。【個人→班活動】

(イ) 班全員が説明できる状態である場合、選択問題以外も取り組んでよいことにする。

(ウ) 課題1 問Aまたは問Bに取り組む。同じ問題を選択した仲間と解決策を考え、説明できるようにする。他者の考えや意見を聞き、それを踏まえた上で自分の問題解決へのアプローチ方法について班活動を通して発表する。【班活動→全体】

イ 学習方略や非認知能力に関すること

(ア) 全学年で規律ある態度「話を聞き発表をする」項目の達成率向上を学力向上の鍵ととらえ「考え、説明し、伝え合う活動」を授業に取り入れている。

(イ) 全学年で定期テスト後、テスト復習レポートを作成している。すべての問題に再度取り組み、生徒全員の理解を深める。Google Classroom から解説動画を見て自分のペースで復習に取り組む。

掲示板には自由に取り組める数学プリントが用意されている。



中学校2年生→中学校3年生の取組【英語】

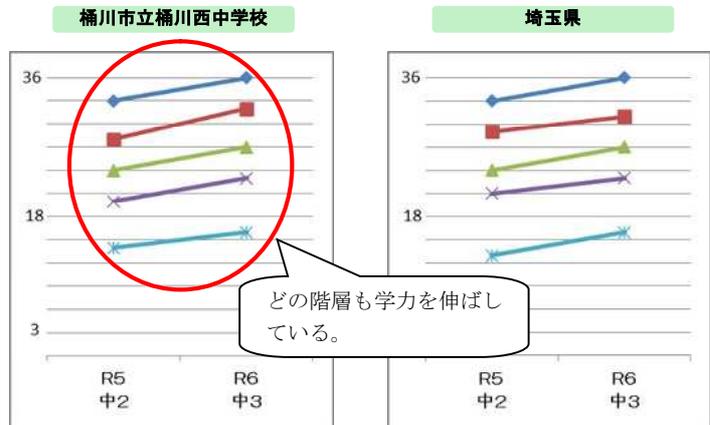
(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化

		中学校2年生	中学校3年生
高 ↑ 学 力 ↓ 低	レベル12		
	レベル11		
	レベル10		
	レベル9		
	レベル8		
	レベル7		
	レベル6		
	レベル5		
	レベル4		
	レベル3		
	レベル2		
	レベル1		

学力を伸ばした生徒の割合
(81.3%) が県の割合
(73.9%) を上回った。

学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

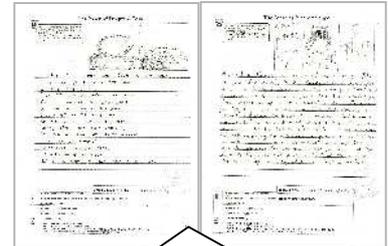
ア「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた課題設定の工夫
生徒にとって必然性があり、魅力的な目的・場面・状況を設定し、生徒自身が本当に表現したい場面に出会える学習課題を設定する。

事例 Ms. ○○ (ALT) におすすめのレストランを紹介しよう

- Ms. ○○ (ALT) のメッセージを聞き、求めていることを捉える。
- 生徒が各自、伝えたいメッセージについて主体的に考える。
- 既習表現を活用してどのように伝えることができるか考える。
- Chromebook を活用し、伝えるメッセージの量を増やすことができないか学びの自己調整を行う。
- 単元末で発表し、対話的な学びにつなげる。

イ 学習方略や非認知能力に関すること

- 仲間と協働して学習に向かう姿勢がある本校生徒の長所を生かし、班でプレゼンを作成する。さらに自分たちの発表を動画に記録し、聞き手の視点から発表を改善し、学びの自己調整に取り組む。
- 生徒同士が英語を伝え合う場面では、できるだけ実践的な場面を設定し、生徒の主体性を引き出す。発話しやすい雰囲気をつくり、生徒の発話量を増やす手立てをとる。



イラスト入りの My Recommendation Place

学校全体での取組 ～学力や非認知能力の向上を支える学校力～

(1) 授業の約束「5つの心構え」

各教室前面に「授業の5つの心構え」を掲示している。学習規律の定着、授業に向かう気持ちと姿勢を全校でつくり上げている。さらに生徒主体で適時点検を行っている。

授業の5つの心構え

進んで学び、自らを向上させよう

- 2分前着席をしよう
- 大きな声であいさつをしよう
- 意欲的に取り組もう
- 自分の考えを表現しよう
- 準備してから休み時間にしよう

2分前着席チェック表

氏名	11:40	11:45	11:50	11:55	12:00
1101	○	○	○	○	○
1102	○	○	○	○	○
1103	○	○	○	○	○
1104	○	○	○	○	○
1105	○	○	○	○	○
1106	○	○	○	○	○
1107	○	○	○	○	○
1108	○	○	○	○	○
1109	○	○	○	○	○
1110	○	○	○	○	○
1111	○	○	○	○	○
1112	○	○	○	○	○
1113	○	○	○	○	○
1114	○	○	○	○	○
1115	○	○	○	○	○
1116	○	○	○	○	○
1117	○	○	○	○	○
1118	○	○	○	○	○
1119	○	○	○	○	○
1120	○	○	○	○	○

(2) 豊かな心の育成

毎日 10 分間の無言清掃、校内に静寂な時間が流れる朝読書、大きな声のあいさつ、響く歌声、除草ボランティアの高い参加率、担任外職員を含むローテーション道徳授業の充実…「愛と笑顔が輝く県下に誇れる桶川西中」を目指す生徒の心の活力が本校の学力や非認知能力の向上の土台となっている。





所沢市立狭山ヶ丘中学校の取組

1 本校の概要

本校は、西武池袋線狭山ヶ丘駅を学区に含み、国道 463 号線が東西に走る交通の利便性が高い地域である。学校の西側からは、茶畑越しに秩父山地や富士山を見渡すことができる。開校 44 年目を迎え、現在、全 15 学級、全校生徒 498 名の学校である。



本校では、学校教育目標を「自立と共生」とし、「はじめに子どもありき」を基本理念におき、「人と人とが交わり、心の交流が実感できる温かな学校」づくりを行っている。

2 令和 5・6 年度の結果

中学校 1 年生→中学校 2 年生の取組【数学】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

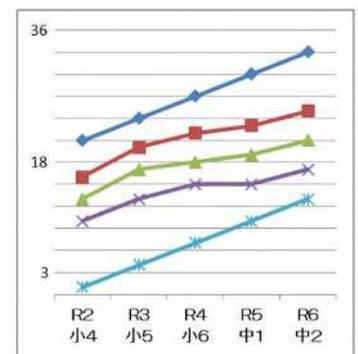
今までの学力の変化



学力の伸びの状況



埼玉県



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 市独自の学習支援員の活用について

本校では、令和 5 年度 1 学年の数学の授業では、市独自の学習支援員制度 (学力向上支援講師) を活用し、週 1 時間の T2 授業を行った。学力向上支援講師は中学校数学教員の長年の経験から、特に数学を苦手としている生徒への支援を行った。T1 は授業中に中位層の生徒への支援に回る時間が確保された。2 学年では、学力向上支援講師を活用し、少人数指導を行った。

イ 生徒同士での教え合いを積極的に取り入れた取組について

基本的に数学の授業では、前時の振り返りとなるドリル学習 (1 学年は音声計算) を授業の冒頭に行っている。解答は教師が示すが、解説は生徒を中心に教え合いをする時間を設定している。授業の展開部分では、本時の例題を教師が説明し、それに関する問題を生徒が個々に解き、解き終わった生徒は、即時、教師からのフィードバックを受けた後、アドバイスが必要な生徒へ手立てを教えるように取り組んでいる。授業者は、「できないことは恥ずかしいことでない。」と日頃から指導するとともに、それを揶揄しない学級を担任や学年職員が作りあげている。



ウ 数学好きを増やす取組

令和5年度の1学年の数学では、2学期に授業開始5分を使い音声計算を行った。目で見た計算の答えを声に出すことですばやくペアで確認できるので、生徒アンケートからも「計算への苦手意識が少なくなってきた」と多数の生徒から感想があった。

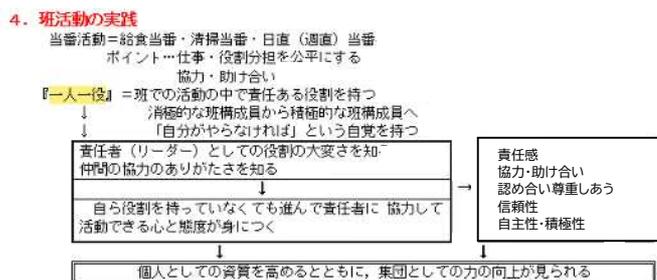
学校全体での取組

(1) 学力の伸びが小さい生徒に対して

国・社・数・理・英の教科では、事前に100問あるプリントを配布し、その中から10分程度で解けるテストを各教科で1年に1回実施している。テストの準備として、1か月程度教科担当だけでなく生徒間でも質問ができる時間を設けている。質問の時間は、部活動がない放課後や昼休みに設定しており、そこでは生徒が教師に質問するだけでなく、基礎的なことを生徒同士で教え合いを行っている。教え合いの効果として、学力の定着を図るだけでなくケアレスミスも少なくさせるメリットも検証されている。このテストは「やればできる」という成功体験を積み上げること、「分からないことをそのままにしない」という学びに向かう姿勢の育成を目的に行っている。そして、家庭で生徒が頑張っている姿を目にすることで保護者が励まし、教師が結果に対して生徒目線で一緒に一喜一憂をするなど、学力の伸びが小さい生徒の学習意欲の向上も目的としている。そういった本校の学び合いの土壌は、「人と人とが交わり、心の交流が実感できる温かな学校」づくりの一つであると捉えている。

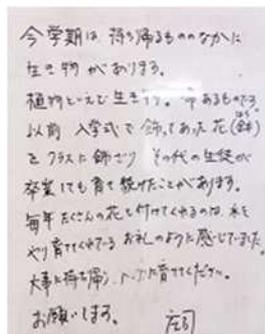
(2) 「相手の気持ちやその場の状況を考え、優しい言葉遣いができる」ようにする取組について

- ① 学校全体で取り組んでいることとして、年度当初の職員会議にて特別活動部から「当番・係・班活動」の活動方針が提案される。生徒には、班での活動の中で責任ある役割を持つよう「一人一役」になるよう指導している。「一人一役」をする目的として

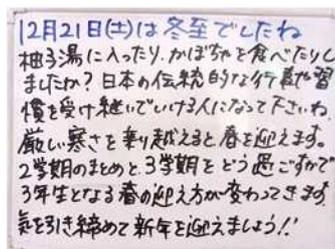


「責任感」、「協力・助け合い」、「認め合い尊重しあう」、「信頼感」、「自主性・積極性」の向上を目指している。そのために、学校全体として「認め合い尊重しあう」取組を補完するために、各学級の帰りの会では、1日の活動を通して仲間のために汗を流してくれた班員を発表しあったり、学級で1名選出したりする取組を行っている。その結果、集会での発表後などでは、自然に拍手がおきるなど生徒がお互いに励まし合う姿や集会後に優しい言葉かけをする姿も見られる。

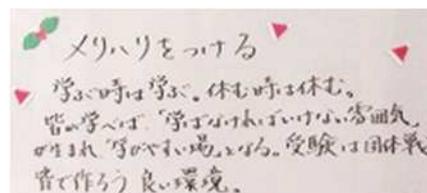
- ② 各学年の廊下には、毎朝学年主任から生徒に向けてメッセージが書かれ、教師からの気持ちが生徒に伝わるように工夫している。教師が「優しい言葉づかい」の手本となるよう取り組んでいる。



1 学年主任



2 学年主任



3 学年主任



深谷市立藤沢中学校の取組

1 本校の概要

本校は深谷市の郊外に位置する花卉栽培が盛んな地域である。1つの小学校から1つの中学校に進学するため、生徒だけでなく、地域のつながりも大変強い。全校生徒数は261人、学級数は11の中規模校である。『想像力』と『協働力』そして、『創造力』へをキーワードに「自分の考えや想いを伝え合い、自尊感情を育む藤中教育」を推進している。特に①気持ちのよい挨拶・返事 ②母校を誇りに想う「全力校歌」③無言ひざつき清掃 ④靴をそろえる ⑤チャイムで開始を『五つの基（もとい）』として定め、生徒会、委員会、学級委員長による生徒の自発的な呼びかけと定期的な評価（褒める場面）を実施している。



その成果として生徒は大変落ち着いた生活を送っており、授業態度が良好なだけでなく、部活動などにも積極的に取り組んでいる。

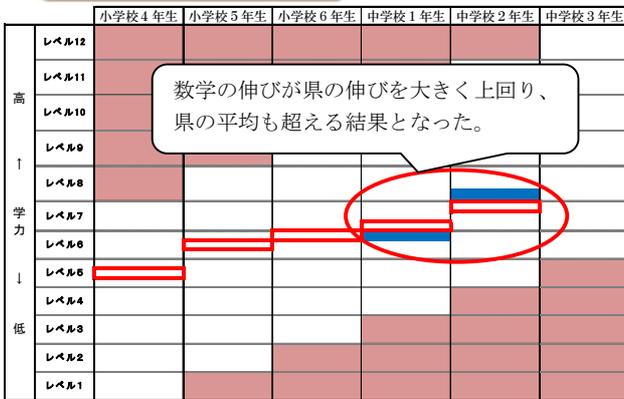
また小中の連携も密に行い、生徒はもちろん教師同士の連携も充実している。

2 令和5・6年度の結果

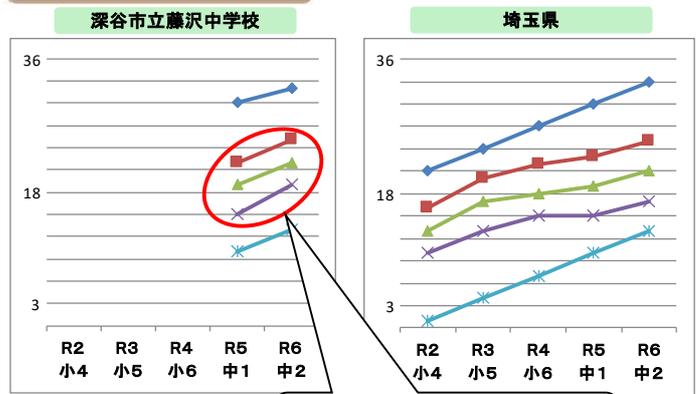
中学校1年生→中学校2年生の取組【数学】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 問題演習の帯活動化

数学の授業開始時に毎時間5問程度の問題を解かせ、簡単な解説を行う時間を設けた。問題の内容は既習内容とし、前時の復習の場合もあれば、それ以前の問題とすることもあった。解説については、タブレットを利用してスクリーン上で教師主導で行ったり、数学班を利用して班員同士の教え合いで解決したりするよう促した。

イ 数学班の常態化

授業開始時から終了時まで常に3、4人のグループにして授業を行っている。その中で、個別解決の時間を確保したり、困ったときにはすぐに班員に助けを求めたり、班員の意見を聞けるようにしたりしている。そうすることで、授業中に何をしているかわからない生徒は少なくなっているものと考えられる。

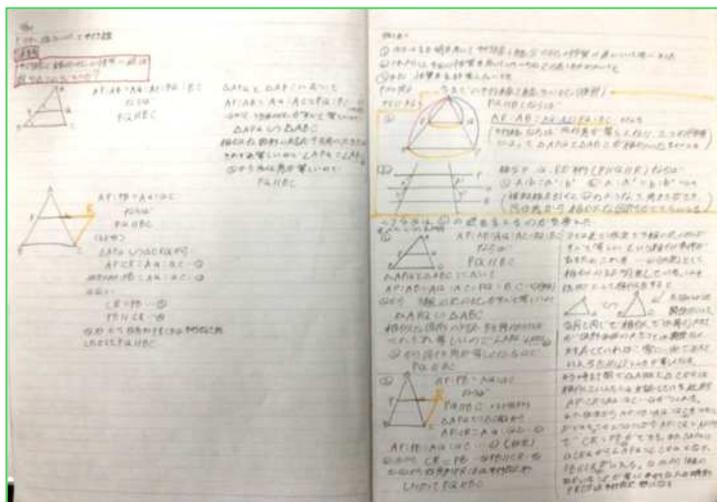


数学班

ウ 前時とのつながりを意識した授業展開の工夫と振り返り・復習の工夫

生徒に毎授業後に3つの視点【①今日の授業で学習したこと②これからの学習につなげられること③次の授業に向けての思いや目標】に沿って振り返りを行わせる。この振り返りの内、特に②を大切に、既習事項が「どんなことにつながりそうか」を生徒に考えさせることで、条件替えを行う意識や、問題を見出す意識を持たせることができたと考える。

また右の写真は生徒のノートの一例である。左のページは授業で使った部分、右のページは授業で扱った内容を



生徒のノートの一例

を自分なりの方法で復習したり、授業中の疑問を自分で証明したりしている部分である。このように授業の復習に毎時間取り組むことでアウトプットの量を増やし、学習の定着を図っている。

エ 主体的・対話的で深い学びの実施

R5年度からR6年度にかけて、主体的・対話的で深い学びの実施について、県や市では伸びがない中、本校2年生については0.1ポイントではあるが、伸びが見られた。上でも述べたように、グループでの協働学習が定着しているため、学力中・低位層の生徒でも、仲間の説明を参考にして、自分の言葉で、証明や説明を述べる機会が多くなる。自分の言葉で説明が「できた」ことで「わかった」が実感でき、主体的に学びに向かっていると考える。

オ 他者の考えを説明する活動の実施

生徒は発表する際、タブレット端末を利用し、教室前面のスクリーンに投影しながら説明することが多い。その際、発表する生徒とは全く別の班の生徒がスクリーンの図や式等を指示棒で指し示す活動を行っている。自身の説明ではない説明を聞きながら、説明に合わせて指示棒を動かすことで、他者の説明を理解しようとする態度が育ったものと考えられる。

学校全体での取組

(1) 意図的な褒める機会の設定

席替えを行う際に、班員全員から個人へ一緒に班活動をしていて見えた「よいところ」を伝え合う活動を行った。仲間からよかったところを認められることで、授業内でも班活動などの学び合いの際に、積極的に他者と関わる姿が見られるようになった。

(2) フラワープロジェクトの実施

先に述べた「藤沢中学校五つの基」を達成するために、生徒会本部が「フラワープロジェクト」キャンペーンを行っている。当たり前のことを当たり前にできるようにして、自分も仲間も大切にする気持ち「好上心」を高める活動により、学校生活を大変落ち着いて、過ごせている。その結果何事にも前向きに取り組もうとする気持ちが高まっている。



藤沢中学校五つの基



越谷市立大袋中学校の取組

1 本校の概要

本校は、特別支援学級3クラスを含む計16クラス、全校生徒477名の中規模の学校である。学校教育目標を「創造」「信頼」「健康」とし、目指す生徒像を「自ら学び、自ら鍛え、自他を尊重し、社会に主体的にかかわる生徒」としている。それを具現化するための合言葉として、「チャレンジ！～創造力を生かして～」と定め、受動的でなく、失敗を恐れずに挑戦すること、また、自分らしい発想ややり方を工夫しながら学び、行動することで目標の達成を目指している。



2 令和5・6年度の結果

中学校1年生→中学校2年生の取組【数学】

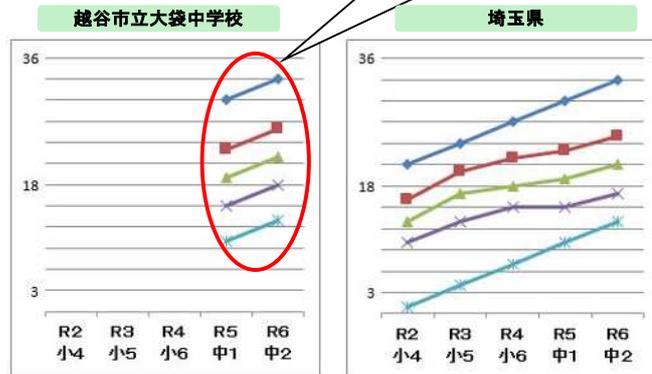
(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況

全ての層で同じような伸びが見られる。



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア よさを称え、自己肯定感を高める掲示物

小テストや課題等の満点者や合格者を廊下に貼り出し、称えるようにしたところ、次への意欲につながる生徒が増えていった。また、上手にまとめられているノートや振り返りを掲示したところ、「書く」ことへの意識が高まり、自己評価シートへの記述も充実してきている。これらは現在も継続して取り組んでおり、一定の成果が見られている。なお、各教科で取り組んでいる。



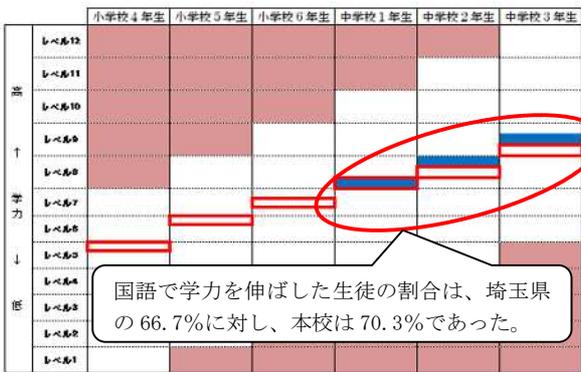
イ 学習方略や非認知能力に関すること

生徒は中学校生活への慣れと自我の芽生えから、学習や生活に対して自分なりの在り方を模索している時期であるが、「決められた課題を提出する」「やるべきことをやる」ということに関しては一貫して指導しており、「勤勉性」は上がっている。理解が不足していたり、取り組み方が緩やかだったりする生徒には、学習の進み具合を生徒・保護者と確認し、課題の分量を減らしたり補習をしたりするなど、スモールステップで対応している。常日頃から卒業後を視野に入れた声かけを行い、目標や計画の「必要性」や、「計画的に実行する」ことの大切さを指導している。

中学校2年生→中学校3年生の取組【国語】

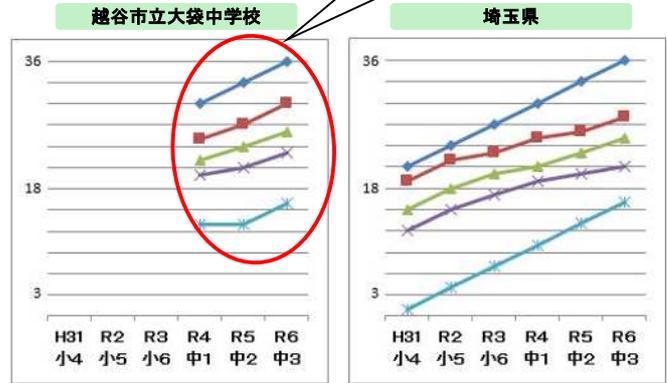
(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況

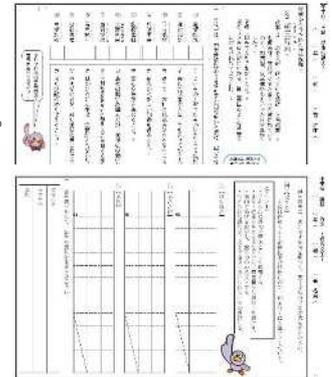
全ての層で同じような伸びが見られる。



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア コバトン問題集の活用と「書く」指導

毎回の授業の際に、短時間で取り組めるコバトン問題集を活用している。継続して活用することで基礎的な事項の定着率が上がっている。また、漢字の学習や長文を音読する学習、暗唱なども取り入れることで読解力を補完したり、語彙力を増やしたりする学習も行っている。さらに、定期的に作文も書かせており、書くことに慣れ、まとめたり表現したりする力も向上している。



イ 学習方略や非認知能力に関すること

特に柔軟的方略、プランニング方略、作業方略、認知的方略が上がっており、1年生後半から2年生全体にかけて自分に合った学習の仕方、計画の立案、学習の準備等、生徒に考えさせ、試行錯誤させながら取り組ませてきたことで、自分なりの学習スタイルができつつある。国語以外でも各教科や行事等で同じように考えさせ、取り組ませている。本校は、教師同士のチームワークがよく、生徒の情報も些細なことまで共有できている。このことが生徒への働きかけにも生きており、多くの教師に分かってもらえているという生徒の安心感につながっている。また、教師同士のチームワークのよさは生徒の目にも映っており、学年や学校が自然と温かい環境となっている。このことも、日常生活を通して非認知能力を高めていく上での一助となっている。

学校全体での取組

(1) 学力の伸びが小さい生徒に対して

教科によって補習を行ったり、個別に補習課題を課したりして、基礎基本の定着と自信に結びつけられるようにしている。

(2) 教科等横断的複合的問題への取組 (右図)

各教科等の見方・考え方を働かせながら最適解を導き出す問題を教師が作問し、定期的に取り組ませている。教科の問題に取り組む姿とは違う姿も見られている。

